

# 教会にて

石崎真由美

赤錆の貼り付いた鉄の扉よ

一〇〇年以上もの長い歳月を

数限らない風雨にさらされ

人たちの掌に押されてきた重さよ

わたしはクリスチャンではない

ぐるりと壁を飾るステンドグラスは

「覆された宝石」

あの詩人の詩の一節を思い出す

外からでは決して見ることの出来ない

むかしむかしの遠い国の

深い穴に嵌まるような話がそこに

でも、

わたしはクリスチャンではない

棚に置かれた大学ノートに

筆跡を置いて帰った人よ

あなたがここに来たように

わたしもここに来ています

さつき

庭先の白いベンチに

一人、座っていた老婆が

時が来たかというように立ち上がり

色とりどりの花の咲く小径を

杖をつきながら向こうへ去った

昼下がりの日の光を

曲がった背中に上手にのせて

きつと明日も明後日も

ベンチに老婆はいるだろう

もしや

もしやわたしはたつた今

聖母マリアの末裔に

出逢ったのかもしれない

※覆された宝石——西脇順三郎「天気」より引用